

地方創生に関する若年者意見交換会 主な意見

経 緯：平成 27 年 8 月 28 日に開催した「第 15 回 黒岩知事との対話の広場」（神奈川から地方創生を考える－人口減少社会への対応と地域の活性化－）において、地方創生総合戦略を策定するにあたり、今後の出生率の推移に大きな影響を持つ 20 代男女の意見を伺うべきであるという意見があったことから、白河委員及び石本委員にご尽力を頂き、大学生を中心とした 20 代男女による意見交換会を開催した。

日 時：平成 27 年 10 月 29 日（木）14 時 00 分～15 時 00 分

参加者：石本委員、大学生（男性 3 名、女性 6 名）、29 歳社会人女性

議 題：結婚、出産、子育てに関する若者の意識等について

主な意見

1 ロールモデルの必要性

- 周りの女性は、「働く」か「子どもを持つか」のどちらかしか選べないという固定観念にとらわれている気がする。働いて、かつ、子どもも育てているようなロールモデルに接することができることが重要だと思う。
- 両立は難しいと考えていたが、様々な家庭を見て、自分も仕事をしながら子育てをしたいと周りに発信していけば、両立も可能なのではないかと思いはじめようになった。

2 教育・知識の必要性

- このような場に来る人は、将来の「ワーク・ライフ・バランス」といったことをしっかり考えている人だが、周りには興味を持っていない人もいる。ここで話し合ったことを、発信して、興味のない人たちにもこうした問題を伝えていく必要がある。
- 若いうちから、自分のキャリアパスについて、就職活動だけでなく、結婚・子育ても含めた幅広い視野で、授業・講義することは必要だと思う。

3 経済的支援の必要性

- 子育ては何とかなると思うが、産んだ責任として子供を生かしていく上で、お金の問題が何よりも心配である。毎日食費のことを考えて生活しているし、夫婦二人でも精一杯である。それを考えると子どもを産むことを躊躇してしまう。
- もっと住居手当を手厚くして、会社の近所に住めるような環境をつくるべきだと思う。

4 基盤整備の必要性

- 保育園に通わせることが現実的に難しい。認可はまず無理で、無認可であれば月に10万円くらいの費用がかかるため、認可保育園のそばに引っ越さなければならない。
- 今の親世代はバリバリ働いている人が多く、子どもを預けることもできない。幼稚園・保育園の問題が一番のネックだと思う。

5 環境整備の必要性

- 独身の人が多い職場ほど、子どもを育てている女性に対する目線は厳しい。会議中には割り切って迎えに行かない親もいた。だから、私も両立は難しいと思っている。
- 「男の人も家事に携わりたいが、忙しくて携われない」ということについては、勤務時間を短くすることで克服できると思う。

6 パートナー・協力者の必要性

- 神奈川県の出産率が低いと考えられる要因について、夫の労働時間が長く、家事・育児の参加率が低いというのは問題だと思った。
- 自分の周りにも地方から来て一人暮らしをしている人は多い。そういう人は、親も近くに住んでいないので、仕事の間に子どもを見てくれる人がいない。

以上

地方創生に関する若年者意見交換会 議事要旨

(女性、大学生)

- 神奈川県の出産率が低いと考えられる要因について、夫の労働時間が長く、家事・育児の参加率が低いというのは問題だと思った。
- 自分の周りにも地方から来て一人暮らしをしている人は多い。そういう人は、親も近くに住んでいないので、仕事の間に子どもを見てくれる人がいない。

(石本委員)

- 若い人たちの価値観が、年長の方の価値観とずれてきていることである。
- イクメンは、現実的にはそういう人はかなり少数ではないかと思っている。

(男性、大学生)

- 私は自分のパートナーの可能性を否定するようなことはしたくないと思っている。パートナーにも仕事をしてほしいと思うし、自分も家事にかかわりたいと思う。

(女性、社会人)

- まもなく結婚を控えている。この1年間ずっと考えていた。
- 私は男性には家事・育児を必要以上に求めない。女性が求める家事のレベルを男性に求めても結局達せず、女性の家事が増えてしまうように思う。
- 保育園に通わせることが現実的に難しい。認可はまず無理で、無認可であれば月に10万円くらいの費用がかかるため、認可保育園のそばに引っ越さなければならない。
- 今の親世代はバリバリ働いている人が多く、子どもを預けることもできない。幼稚園・保育園の問題が一番のネックだと思う。

(女性、大学生)

- 「男の人も家事に携わりたいが、忙しくて携われない」ということについては、勤務時間を短くすることで克服できると思う。
- もっと住居手当を手厚くして、会社の近所に住めるような環境をつくるべきだと思う。
- 日本では、個人でキャリアや家庭プランを築いていかななくてはいけないような風潮があるが、もっと他人と協力し合っていく必要があるのではないかと考えている。

(男性、大学生)

- 女性の社会進出が進んでいるが、それに伴ったサポート制度が発達していないと思う。
- 若いうちから、自分のキャリアパスについて、就職活動だけでなく、結婚・子育ても含めた幅広い視野で、授業・講義することは必要だと思う。
- 会社を経営している管理職たちの意識改革も必要である。

(女性、大学生)

- 周りの女性は、「働く」か「子どもを持つか」のどちらかしか選べないという固定観念にとらわれている気がする。仕事をしている女性というのは、睡眠時間が少なく、仕事ばかりやっているような「モーレツキャリアウーマン」というイメージばかり。働いて、かつ、子どもも育てているようなロールモデルに接することができることが重要だと思う。
- ベビーシッターに対する補助金、特に学生がベビーシッターをすることの奨励などがもっとあるといいと思う。

(男性、大学生)

- 自分たち3人(矢代さん、森泉さん、波岡さん)も実際にベビーシッターの経験がある。ある夫婦からは、子どもはベビーシッターから学びを得ることができるという意見をもらったが、学生にとっても親や子どもから学びを得ることができるということを浸透させていきたい。

(女性、社会人)

- 保育園から迎えの依頼の電話が毎日のようにかかってきて、早く帰り、他の人に仕事のしわ寄せが行ってしまうことも多々あった。
- 独身の人が多い職場ほど、子どもを育てている女性に対する目線は厳しい。会議中には割り切って迎えに行かない親もいた。だから、私も両立は難しいと思っている。
- 男性も皿洗いをしただけで、家事をしたと思いついでいる人もいる。ただ、女性からしてみれば、そこからさらに弁当を作ったりする必要があるなど、家事はそんなにシンプルなものではない。

(女性、大学生)

- 両立は難しいと考えていたが、様々な家庭を見て、自分も仕事をしながら子育てをしたいと周りに発信していけば、両立も可能なのではないかと思いつめるようになった。
- 大学の授業に来る人は、男性並みに働いている人ばかりで、そういった人は「キャリアが落ち着いてから子どもは産めばいい」という人が大半だった。

(男性、大学生)

- ロールモデルは大企業勤務の人が多かった。彼らは時短勤務も行っている。
- 公務員、中小企業の人には時短勤務が難しいはずなので、中小企業で働く人たちの環境も変えていく必要があると思う。

(女性、大学生)

- 会人になってまた大学に戻られた人がいる。大学生の時に子どもを産んだ。地域のファミリーサポートなどを活用して、大学の実習にも参加しているようだ。

(女性、大学生)

- 最近では待機児童が増えているにもかかわらず、国は子どもをたくさん産んでほしい、
と言う。産んでも子どもをちゃんと育てられるのが不安である。
- 幼稚園や保育所の設立がもっと進めばそうした問題を解決できるし、雇用も生むこと
ができる。

(男性、大学生)

- 自治体も使えるお金が減ってきているので、保育園を増やすこともままならない状況
である。もっと民間が参入できるような仕組みを作っていくことも重要だと思う。

(男性、大学生)

- 地域のつながりが希薄になったことも、子どもが産みづらくなった要因ではないか。

(男性、大学生)

- ここで話し合ったことを、どこかに発信して、興味のない人たちにもこうした問題を
伝えていく必要がある。実際には関心がある人の間で止まってしまっている。

(石本委員)

- 地方創生推進会議で意識が高い人たちが発信していくことで、徐々に意識が低い人た
ちに浸透し、底上げができていくという意見があった。

(女性、社会人)

- 私がつまづいたことなどについてこれからも話せる機会があり、それで私より若い人
たちが何か学べれば良いと思う。私は、仕事と子育てを両立している人の話も含めて
聞いていきたい。そういう場自体がこれからもっと大事になっていくと思う。

(女性、大学生)

- 興味がない人には、興味があるキーワードで伝えて、そこから気づきを得てもらうこ
とが重要だと思う。例えば「ワーク・ライフ・バランス」というキーワードではなく、
「コミュニケーション」など就活に使えるキーワードなどを使えば、価値観の違う人
も呼び込める可能性がある。

(女性、大学生)

- 「結婚は30歳になってから」と思っていたのは、両親が仕事と育児の両立ができな
かったため。
- 私も木済さんと同じように、職場の同僚からどういう白い目で見られるのかを気にし
て、なかなか両立は難しいと思い込んでいた。
- また、夫からも「仕事をしているからお前は子育てができない」といわれるのも恐れ
ている。

(女性、社会人)

- 子育ては何とかなると思うが、産んだ責任として子供を生かしていく上で、お金の問題が何よりも心配である。毎日食費のことを考えて生活しているし、夫婦二人でも精一杯である。それを考えると子どもを産むことを躊躇してしまう。

(女性、大学生)

- 私の場合は、親の影響が大きい。男尊女卑の家庭で育ったこともあり、私が夢を持って、それを親から否定されることが多い。私が働きたいと言っても、パートナーから拒絶されることもあるかもしれない。
- いろいろな価値観を認め合っていける環境がほしいと切実に思う。

(男性、大学生)

- 私は子どもがたくさんほしいし、バリバリ働きたいと思っているが、現実と理想のギャップが大きすぎる。現実を考えると、子どもは2人が限界だと感じている。

(女性、大学生)

- 私はそんなにあせって子どもほしいとは思っていない。周りには、私と同じ考え方の女性が多い。最終的に子どもを1人も持たないということになっても構わない。

(女性、大学生)

- 私はできるだけ早く子どもがほしい。私の周りがそれを薦める人が多いことと、精子・卵子の老化を聞いて、危機感を持った。また、おじいちゃん・おばあちゃんにひ孫を見せたい、という気持ちもある。
- 就職活動という人生で誰もが考える機会に、一緒に結婚・子育てについても考える機会を持つことが必要だと思う。

(女性、大学生)

- 看護師という仕事は、一度辞めても復職しやすいし、病院にも託児所がついているなど恵まれている部分もあるが、そういう人ですら結婚・出産についての意識が低い。

(石本委員)

- 就職のことを考えるよりも、働くことを考える方がよっぽど難しい。

(女性、社会人)

- 今のうちから、様々な人に出会ってロールモデルをたくさん知っていることはすごく良いことだと思う。

総括 (石本委員)

- この場で、こういう話を聞いてくれる人がいるということだけで、良い方向につながっていく。今後もこのような場で色々議論して、将来を見ていくことが必要だと思う。